

釈迦の用いた比喻を読み解く  
人名・用語の解説

ジョージ・レイコフ(George Y. Lakoff) (1941- ) 米生まれの  
アメリカの言語学者。カリフォルニア大学バークレー校教授。  
プロトタイプ  
→ある意味範疇に属するものよりも、典型的・中心的と考えられるもの。  
メトニミー(意味)  
→連類法の一つ。あるものを表すのにそれと関連が深い別の語を使うこと。  
例: 青島は大学が多い  
メタファー(意味)  
→比喩。例: 人生は夢。意味ではそれ「無し」「よりだ」(手紙でない方法)

「釈迦の用いた比喻を読み解く」

西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』  
(中公新書)、中央公論新社 (三徳図書館 請求記号:080-C64-2220)

私が大正大学大学院に進学したのは今から30年前の1992年になりますが、最新の言語学理論を古代インド語の文献に応用しようと野心を抱き、言語学入門書や概説書を買って読んだものでした。当時は、ソシュールの言語学とチョムスキーの生成文法が二大潮流でしたが、特にチョムスキーの生成文法の考え方を土台として古代インド語の統語論(シンタックス)を解明する試みを修士論文の課題といたしました。

時は流れ、その当時からの研究が始まってはいたましたが、まだ研究者も少なかった「認知言語学」が、すっかり言語学の一角を占めるようになってきました。その中心的学者であるジョージ・レイコフらは、「メタファー」(類喩)を言語学研究のテーマとして確立することに成功したと言えます。古代インドの文献学にこれらの研究成果を応用するという試みはまだ始まったとすら言えませんが、今後は確実に論文も増えてくるものと思われまます。

西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』は、言語学の潮流回顧から始まって、本格的な認知言語学の考え方に至るまで、哲学者の野矢氏が認知言語学を専門とする西村氏に問いかけるという類例のない書物です。その意味で、言語学に触れたことのない本当の初心者には少々手ごわいところもありますが、たんに認知言語学を礼賛するだけの内容でなく、野矢氏による鋭い批判(ファッコミ)もときおり挟みながら、認知言語学の中心的トピックである、「プロトタイプ」や「メトニミー」「メタファー」などについて議論を交わしています。

これらの考えを古代インドで作成された文献に適用するなどのような結論が導かれるかについて考えることじたいが、私にとってたいへん胸が躍る行為です。このような行為は、けっして研究者だけの特権ではなく、古代インドの文献(やその翻訳)を読むあらゆる人々に開かれているものです。その第一歩としてこの200頁余りの手頃な新書を推薦する次第です。

公益財団法人 三康文化研究所  
2022年度第1回公開講座  
発表 16時~17時(観覧は任意)  
釈迦の用いた  
比喻を読み解く  
古宇田 亮修  
オンライン開催  
Zoom  
申込受付中  
予約は要りません  
申し込み

第6回 研究員のオススメ本紹介コーナー

『釈迦の用いた比喻を読み解く』

今回ご紹介いただいた三康文化研究所研究員は...



古宇田 亮修 (こやだ りょうしゅう)

専門分野: 梵語文献学、仏教思想史

2011年博士課程修了。博士論文『釈迦の用いた比喻を読み解く』(2012年)で博士号取得。2013年より三康文化研究所研究員として勤務。2015年より三康文化研究所研究員として勤務。2017年より三康文化研究所研究員として勤務。2019年より三康文化研究所研究員として勤務。2021年より三康文化研究所研究員として勤務。



古宇田研究員による選書コーナー

## 「釈迦の用いた比喻を読み解く」

西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（中公新書），  
中央公論新社（三康図書館 請求記号：080-C64-2220）

三康文化研究所研究員の古宇田亮修（こうだ りょうしゅう）と申します。文献学によるインド宗教史の解明をライフワークとして研究を続けています。

私が大正大学大学院に進学したのは今から 30 年前の 1992 年になりますが、最新の言語学理論を古代インド語の文献に応用しようと野心を抱き、言語学入門書や概説書を買いたったものでした。当時は、ソシュールの言語学とチョムスキーの生成文法が二大潮流でしたが、特にチョムスキーの生成文法の考え方を土台として古代インド語の統語論（シンタックス）を解明する試みを修士論文の課題といたしました。

時は流れ、その当時から研究が始まってはいましたが、まだ研究者も少なかった「認知言語学」が、すっかり言語学の一角を占めるようになってきました。その中心的学者であるジョージ・レイコフらは、「メタファー」（隠喩）を言語学研究の一テーマとして確立することに成功したと言えましょう。

古代インドの文献学にこれらの研究成果を応用するという試みはまだ始まったとすら言えませんが、今後は確実に論文も増えてくるものと思われまます。

西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』は、言語学の潮流回顧から始まって、本格的な認知言語学の考え方に至るまでを、哲学者の野矢氏が認知言語学を専門とする西村氏に問いかけるといった類例のない書物です。その意味で、言語学に触れたことのない本当の初心者には少々手ごわいところもありますが、たんに認知言語学を礼賛するだけの内容でなく、野矢氏による鋭い批判（ツッコミ）もときおり挟みながら、認知言語学の中心的トピックである、「プロトタイプ」や「メトニミー」「メタファー」などについて議論を交わしています。

これらの考えを古代インドで作成された文献に適用するとどのような結論が導かれるかについて考えることじたいが、私にとってたいへん胸が躍る営為です。このような行為は、けっして研究者だけの特権ではなく、古代インドの文献（やその翻訳）を読むあらゆる人々に開かれているものです。その第一歩としてこの 200 頁余りの手頃な新書を推薦する次第です。（古宇田亮修）